

# 韓愈の言語(一)

—歌詩における文學的考察—

花 房 英 樹

## 一

「唐詩」は、唐代文學を推し進める力であつた。文學の創造に従う人が、全能力をそこに集中し、そこで表現の手法を練磨していたからである。しかし、今はすでに、失われた作品が少くないように、十分には知られぬ詩人もあつた。このような數多い群像の中で、なお光芒を放ちつづける才能として、しばしば「李・杜・韓・白」の名が挙げられるが、まことこの四人こそは、唐代を通じての著しい個性であつた。

ただし、それぞれの今に傳わる作品數には甚だしい差がある。最も多いのは白居易であり、その數は二千九百を越えて一代を壓する。杜甫ははるかに下るものの、なお千五百を存し、李白も杜甫と似て千四百。ともにもかなりの量である。これらに對して、韓愈の作品は甚しく少い。わずかに四百を過ぎるほどである。李・杜に比べれば四割にも遠く及ばず、白居易と並べれば、二割にも達しない。そのような韓愈の作品が、李・

杜・白に對して、個性の特異さを主張し得るのは何故であろうか。ここに、その文學の特質を考察するよすがとして、言語の分析を試みようとするのである。

先ず文字を對象にとろう。一般に文字の總量は作品の量とともに上下する。作品量の多い白居易においては十八萬六千を越える。杜甫は十萬五千に近く、李白も七萬七千を過ぎる。それらに對して韓愈は最も少く四萬三千餘。ただしこの韓愈における數は、作品數から見れば、かなり高い値いをもつ。作品數は李・杜に比して四割にも遠く及ばないが、文字の總數から見れば、四割を越すからである。しかも、文字の種類について考えれば、この傾向はさらに上昇する。概算すれば、李白は三千五百六十字、杜甫は四千三百五十字となる。白居易も四千六百字を數えるにすぎない。これらに對して、韓愈は決して少くはない。杜甫と相い似て四千三百を越えるからである。それは、文字の總量から見て、韓愈



に見える。諸家の注に示されるように爾雅から出る。「釋天」の「太歲在酉曰作噩。」にもとづき、酉年を謂うための文字である。また「砭」は「喜侯喜至 055」の

又如心中疾 箴石非所砭

から見え始める。説文の「以石刺病也。」という本義に則る。「苦寒 114」の「凶鷗攪宇宙、鉞刃甚割砭。」にも見える。「割砭」は、揚雄の太玄の「達於砭割」から出るのであろうが、意味は説文の方向である。「磔」は「陸渾山火 108」の

電光礪磔頑目暖

にある。東方朔の十州記の「兩目如礪磔之交光。」から出るが、慧琳の一切經音義には、「今吳名電爲礪磔」ともある。「礪」もまた文選に存しない文字である。このように文選に見えぬ文字の多くは、ほぼ漢代以前の書に據るのである。

漢代以前の書に向う關心は、字體にもまた伸びている。ことさらに古體に従う場合が多いことで知られる。たとえばあの「噩」は、史記の「天官書」では「鄂」と書かれていたが、韓愈は史記を避けて爾雅を採るのである。「赴江陵途中寄王二十補闕 029」の

赫然下明詔 首罪誅共咬

とある「咬」は、「遠遊聯句 226」の

繫石沈斬尙 開弓射鵬咬

にも見え、韓愈は常に同じように書く。しかし他書においては「兜」とも書かれていた。文選の劉峻の「廣絶交論」には、「共工之蒐慝、驩兜之掩義」とあり、遡つて尙書にも、「舜典」に「流共工于幽州、放驩兜

于崇山。」とあつた。史記の「五帝本紀」も同じである。しかし「古文尙書」においては、「鵬咬」と明書されていた。「咬」は「鵬」とともに、韓愈においては古體として書かれているのである。「月蝕詩 154」の

森森萬木夜僵立 寒氣熨肩頑無風

に見える「熨」についても同様である。段玉裁の説文解字注には、次のように述べられている。

西京賦・吳都賦、皆用熨肩字。作力之貌也。熨俗譌聶、肩俗譌肩、又譌嵐。學者罕知其本矣。今考文選兩賦、皆作聶肩、不作熨肩。詩大雅蕩、內熨于中國。正義曰、兩京賦云、巨靈熨嵐。

「熨」が古體であることを明説している。今の文選も、段氏のいうように譌字を書いているが、韓愈の當時も「聶」を用いていたと考えられる。「吳都賦」で李善は「西京賦」を引いて「聶」に作り、呂向も「聶肩、用力之貌。」と釋しているからである。また、白居易の「題海圖屏風」にも「聶肩牽不動」とあり、元稹の「野節鞭」にも「本用鞭聶肩」ともある。そのような譌字が用いられている時に、韓愈はあえて「熨」という古體を用いているのである。

このような古字は、古體をも含めて、かつて遠い過去に用いられたことがあつたとしても、その後、詩文を通じ、いわゆる文學的作品と見なされるようなものには避けられ、ほとんど文獻の上から姿を消し、當時においては、ただ古書の中で重い鎧を裝つて居据り、動くことを忘れたような死語的な文字であつた。たとえばあの「砭」は、石針が鐵針に代ることによつて、「鍼」に置換えられ、忘れ去られていた。中には音義

ともに定かでないようなもあつたであろう。「征蜀聯句 221」の

投命開宿鑿 填隍儼僭僭

における「宿鑿」や「僭僭」などは、わずかに高度な知識をもつ人々のみ、解せられるような文字であつたと考えられる。とすれば、これらの文字は、視覚的にすでに現實離れしたものと異なる。たとえ文選に見える文字であつても、當時においてはもはや古典的なさびをつけていた。先に挙げた「狂」は、「納涼聯句 220」の

凄如狂寒門 皓若攢玉璞

に見えるが、文選では揚雄の「甘泉賦」の、「登掾樂而狂天門兮」にある。そこでも李善は、舊注を引いて「李奇曰、狂音貢。蘇林曰、狂至也。」と記さねばならなかつた。すべてこれら一群の文字は、現實の生活や生活の感情とは全く離れたものであつた。ただしその非現實性の故に、かえつて高古な閃光を放射しているのである。韓愈はこのような高古な色調を帯びた文字を用いて、歌詩を書いていたのである。

## 二

この古字を用いることは、字體に關する場合を除けば、外ならぬ古語を使用することである。長らく顧みられなかつた「磔」の字を用いるのは、「鍼」と異なる音義をもつ「砭」という語を使用することである。「磔」なり「砭」なりが、それぞれに獨立して用いられたのではなく、常に「磔」 という一語として用いられていることをも考え合せば明かとなる。まこと韓愈は好んで古語を使用する。代表作の一として數えあげられる「南山詩 016」にも數多く見出される。

厥初孰開張 僊俛誰勸侑

における「勸侑」もその一である。もともと「侑」の字はさほど頻りに用いられたものではない。李・杜にも一字すら見えぬ。ただ白居易には、「郡齋旬假命宴 2094」に「侑食樂懸動」と見える。周禮の「膳夫」の、「王以樂侑食」に據る語である。鄭注には「侑、猶勸也。」ともある。しかし「勸侑」と連用されることは珍らしい。馬融の「長笛賦」の「食舉雅徹、勸侑君子。」が知られる程度である。恐らくは韓愈のもとづくところはここであろう。先に觸れた「苦寒 114」にもそのような例は少ない。

伊我稱最靈 不能女覆苦

における「覆苦」もそうである。「苦」字は白居易にも、「酬鄭侍御多雨春空過詩 2052」に「苦城備壞墻」として見える。文選にも劉峻の「廣絶交論」に、「刎頸起於苦蓋」とある。ここでは舉正に「苦、蓋也。」と注されるが、「覆苦」の語は先行の書に見出し難い。ただ方世舉注に、晉書の「郭文傳」が示され、「倚木於樹、苦覆其上而居焉。」が舉げられている。「覆」や「苦」は珍らしい文字ではないが、「覆苦」は稀にしか用いられぬ語であつた。古語のみならず稀見の語さえ韓愈はしばしば採り上げる。

もとより常見の語であつても、意味の方向として稀にしか用いられぬ場合を採ることも多い。あの「征蜀聯句」の

日王忿違傲 有命事誅拔

における「日」について、舉正には「此語左傳漢史屢見。入詩則庾信始也。日余濫推轂、民願始天從是也。」とある。庾信の詩とは「任洛州酬

薛文學見贈別」であるが、その意味は、左氏傳文七年の「日衛不睦。」とか、晉語四の「日吾來此也。」の方向である。それは杜預や韋昭がともに「日、往日也。」と注する意味である。ただし李・杜・白にはこのような用法はなく、文選にも採し得ない。「敕」にもこれに類する古用がある。「送區弘南歸 101」における

開書拆衣淚痕啼 雖不敕還情庶幾

とか、「燕河南府秀才 135」における「還家敕妻兒、具此煎魚烹。」などである。「敕」は當時においては、前者の「母」の言や、後者の「妻兒」に對する場合に用いられることはほとんどなかつた。李・杜・白にも絶えて見えない。しかし韓愈は、一般に長上の下卑に對する場合に用いるのである。

このような古語の使用において、字と結びついた意味のみでなく、文字から離れて典故と結んだ特殊な場合もある。典型的な例はいわゆる歇後の語である。「寄盧全 134」の

苗裔當蒙一世有 豈謂貽厥無基趾

における「貽厥」は、尙書「五子之歌」の「有典有則、貽厥子孫。」とか、詩經「文王有聲」の「貽厥孫謀、以燕翼子。」とかにもとづき、單なる字面からは出てこない「子孫」を、内に含む語として用いられている。また、「秋雨聯句 221」の

吾人猶在陳 僮僕誠自鄙

における「在陳」は、言うまでもなく論語や莊子に見える、あの「在陳絕糧」の故事にもとづく語であり、「自鄙」は、左氏傳襄二十九年の「吳季札來聘、請觀周樂。自鄙以下無譏焉。」から採られた語である。

「自鄙」はその文字から離れて、杜注に「以其微也。」という、そのような意味をもつものとして用いられているのである。もとより歇後の語は、すでに古くより行われ、唐代にも用いられた。杜甫における「嶽麓山道林二寺行」の、「山鳥山花共友于」の「友于」もそれである。しかしこの「友于」は、すでに杜甫以前にしばしば用いられていた。韓愈における歇後の語は、そのような類とは異り、甚しく目どまりするものが多い。以前に用例が少く、時としては、以前には用いられぬものをも始めるからである。

歇後の語を始めることは、古語を用いながら、自己の意を加えることであつた。いわば形態を承けながら意味を變えることであつた。このような態度は、そのまま意味を存しつつ、形態を變える方法をも導く。

「答張徹 053」の

峨豸忝備列 伏蒲愧分攄

に見える「伏蒲」のような場合から起る。方世舉注に、漢書「史丹傳」の「丹直入臥内、頓首伏青蒲上。」を引き、「應劭曰、以青規地曰青蒲。」と加えるが、まさにそこをを負う語である。ただし應劭によれば「青蒲」は一語であるから、文選の任昉の、「天監三年秀才文」に見える「日伏青蒲、罕能切直。」とか、杜甫の「北遊」における「下憫萬民瘡、斯時伏青蒲。」とか、さらには白居易の「東南行一百韻」の、「議高通白虎、諫切伏青蒲。」などのように、ことごとく「伏青蒲」として綴られ、韓愈のように緊縮した形態とはなっていない。韓愈は形態を變容するのである。「豐陵行 098」の

哭聲匄天百鳥噪 幽坎晝閉空靈輿

における「匄天」などは、魏の陳琳の「武庫賦」に見える「聲匄隱而動天」から發するものであるが、全く新しい語のように響く。「雨中贈張十八<sup>151</sup>」の

雌聲吐款要 酒壺綴羊腔

における「雌聲」に至ると、いよいよその傾向を強める。晉書「桓溫傳」の「形甚似、恨短。聲甚似、恨雌。」を負う語ではあるが、據るところから遠く離れて、全く異つた形態をとつてそこにある。もとより形態を變える方法として、凝縮とは反對に擴散の場合もある。「之」や「以」などを加えるのもその一例である。時には「秋懷詩<sup>024</sup>」の、「所要石與甌」というような、「儋石」を割るに「興」の語を以つてし、さらに上下を倒するようなことをも進んで行く。いずれも典故を背負いつつ形態を新しくする方向の語である。

倒用といへば、傳統的な熟語を顛倒することも頗る多い。「參差」は常語であり、韓愈においても「南山詩<sup>016</sup>」から始まつて頻用される。ただし「孟生詩<sup>155</sup>」の

諒非軒冕族 應對多差參

のように顛倒することもある。さらには「奉和杜相公太清宮紀事<sup>301</sup>」の

四眞皆齒列 二聖亦肩差

のように「差肩」を倒用することもある。「差肩」は管子の「輕重甲」より見えるが、倒用の例はほとんどない。舉正に、「贈劉師服<sup>141</sup>」の「莽鹵」につき、

鹵莽本莊子。然唐人多倒用之。柳子厚沈昏莽鹵、又食貧甘莽鹵。白

樂天養生仍莽鹵、又始覺琵琶絃莽鹵、所用同也。

とあるが、柳宗元や白居易の影響を及ぼすほど、韓愈は積極的に顛倒語を作つたのである。

この積極性は、やがて全く新しい語を造るに至る。たとえば「汲古」である。「秋懷詩十一首」の第五<sup>022</sup>の

歸愚識夷塗 汲古得脩綆

に見える。着想は莊子の「至樂」の、「綆短者不可以汲深。」に據るのであろう。ただし莊子の「深」は、荀子「榮辱」に改められているように「深井之泉」を指す。このようなもともと對物的な「汲」の語を、抽象的な「古」に連ねたのは、後漢書の「張皓王龔傳論」にある「好通汲善」などの用法が顧みられたからであろう。「送惠師<sup>046</sup>」の

是時雨初霽 懸瀑垂天紳

における「天紳」もまた、韓愈に始まるように考えられる。「答張徹<sup>053</sup>」にも、「泉紳拖脩白」とあるように、瀑布を「紳」に擬するのは他にも見えるからである。瀑布を「帶」に擬することは、劉宋の王韶之の神境記にも、九疑山について「山頂有飛泉如帶」とあつた。それらを承けつつ、宋之問の「早入清遠峽」における「兩巖天作帶、萬壑樹披衣。」などを考慮した結果であろう。葛立方の韻語陽秋に、孟郊の「與坡翁詩」の「簷溜擲天紳」を掲げるが、むしろ韓愈に倣つたものであろう。

また異つた方法の造語もある。「雜詩<sup>301</sup>」の

得時能幾時 與汝恣啖咋

の「啖咋」である。方世舉は「玉篇、啖、食也。咋、聲大也。」と注するが、ここでは「咋」は玉篇の訓とは異り、漢書「東方朔傳」の「猶孤

豚之咋虎」と似て、「酢」とも書かれる意味であろう。「答張徹」にも「梅狂已咋指」ともあるからである。「啖咋」は類語を重ねたものであつた。この類語の連用は他にも多い。「南山詩 016」の

斐然作歌詩 惟用贊報酢

における「報酢」もその一である。方世學は廣韻の「酢、報也。」を引くが、この訓は廣韻に發するのではなく、すでに玉篇に見える。「酢」は李・杜・白にも存せず、文選にも見えず、韓愈においてもここだけしか現われぬ語である。あるいは玉篇などの辭書から得られたものかも知れぬ。とすれば、「報酢」は辭書における提示語と、その訓とを結びつけて作られたものとも考えられる。しかしこのような類語の連用も韓愈に始まるものではない。先に挙げた馬融の「長笛賦」に見えるあの「勸侑」のように、すでにこれまで行われていたことである。韓愈は過去の方法を以つて、自らの立場で新語を造つて行つたのである。

もとより新語への強い關心は、伸びていわゆる俗語へも及んでいた。

「贈劉師服 141」の

朱顏皓頸訝莫親 此外諸餘誰更數

における「諸餘」もその一である。野客叢書には、「唐人以俗字入詩中用者、如王建詩、朝回不向諸餘處。」という指摘もあり、唐音癸籤には「猶他也。」と釋され、張相の詩詞曲語辭匯釋には「猶一切或種種也。」と解されている。王建的詩は「贈人」であるが、それも韓愈に倣つたものであろう。また「東都遇春 118」の

得聞無所作 貴欲辭視聽

における「貴欲」も、王建的「送衣曲」に「貴欲征人身上暖」とも見え

るが、すでに『李白歌詩索引』の「序例」で言及したように、李白においても、「贈溧陽宋少府陟 85」の「貴欲呈丹素」などの數例があり、俗語と見なさるべき語であつた。ただしこの語は文選における阮瑀の「爲曹公作書與孫權」の、「貴欲觀湖漢之形」にもすでに見えており、半ば雅語として受容れられてもいたと考えられる。韓愈は俗語をも數少くなく採り上げるが、その多くは、古語ないしはそれに匹敵する新語と調和する範圍であつた。

韓愈の語彙には、文選などにも見出し難い古語が含まれるとともに、古語における觀念と形態とを交錯させた新語もあり、さらには獨特な造語や俗語も加わつていた。古語は、當時の詩的語彙から距離をもてばもつほど高古であり、造語も過去の常識を超越すればするほど鮮奇である。しかし、古語や造語も、構造的に見れば相い隔たるものではなかつた。造語は着想を過去から仰ぎ、過去の語彙の構成に則しつつ、知的な立場から創造されていた。古語と造語は斷絶しているものではなく、本質的に調和していたのである。この傾向は俗語の場合にも見られる。あの「諸餘」にしても「貴欲」にしても、音に重點が置かれて文字に移されたのではなく、文字そのものに義の先端が突き出されるような様相をもつている。「貴欲」は、敦煌出土の「百喻經」の

昔有一婦。荒婬無度。欲情既盛、嫉惡其夫。每思方策、規欲殘害。

に見えるような「規欲」としては現われないからである。この内面的な關聯は、古語の高古と造語の鮮奇とをある一點において結合させる。高古なものは、現實離れをすることによつていよいよ目新しく、鮮奇なもの、現實に慣れ合わぬことで、もともと目止りするのである。古語も

造語も、傳統的な詩的言語と異なるために新鮮なのであつた。韓愈の語彙は、常ならぬ鮮奇さを帯びるところに特質があつたのである。

三

韓愈の語彙にはさまざまな面があつたが、常に一つの志向をもつていた。それは語と語との結合の仕方にも現われている。先に「救」に言及した際の「還家救妻兒、具此煎魚烹。」の句において、下句の五言中に、類語を三疊することが見える。朱彝尊はこの疊み方について、「非昌黎無此句法。」と注意しているが、まさしく異様な連ね方である。ただしこのような疊法は他にもある。「寄崔二十六立之<sup>153</sup>」の

野草花葉細 不辨薺菜施

における「薺・菜・施」もそれである。もとよりこの疊語は韓愈に始まるものではなく、すでに離騷の「薺菜施以盈室兮、判獨離而不服。」に見える。このような疊法が意識されると、韓愈はさらに推し進めて行く。

「別趙子<sup>152</sup>」の

蚌贏魚鼈蟲 瞿瞿以狙狙

の上句や、「陸渾山火<sup>108</sup>」の

虎熊麋猪逮猴猿 水龍龜龜魚與龜

鴉鷓鷃鷹雉鵲鷓 燂魚煨燻孰飛奔

などである。まこと奇怪とでもいうべき句法である。

このような句法はまた、そのままに句と句との間にも伸びている。あの「南山詩<sup>016</sup>」の

延延離又屬 夫夫叛還違

嗚嗚魚闖萍 落落月經宿

閶闔樹牆垣 嚙嚙架庫廐

參參削劍戟 煥煥銜瑩琇

と連り續けて行く十四句に見える雙語の疊法である。「古詩十九首」の「青青河畔草、鬱鬱園中柳。」など、先蹤と考えられるものはあるが、それらとは全く異なる形にまでせり上つていく。この方向は、同じ「南山詩」の「或」の連用にも見られる。

或連若相從 或蹙若相鬪

或妥若弭伏 或竦若驚雉

から始まり、

或如龜坼兆 或若卦分絲

或前橫若剝 或後斷若妬

に至る五十一句である。また時には「雙鳥詩<sup>109</sup>」の

不停兩鳥鳴 百物皆生愁

不停兩鳥鳴 自此無春秋

不停兩鳥鳴 大法失九疇

のような形ともなる。すべて先に例を見出し難いほど、類を絶して奇警である。この一群の措辭は、「南山詩」を、洪興祖が「似上林・子虛賦。」といい、顧嗣立が「自騷賦化而出。」と指摘するように、「鋪陳」の類型に屬する。表現手法として見れば、語を盡して事態を敘述しようとするものである。そこには、事態を直觀的に把握し、直觀的に理解され得るように、表現しようとするよりも、事態を分析し、その分析に立つ認識を詳細に表現しようとする強い意欲が見られる。



この分析的な態度は他の面にも現われている。「符讀書城南 162」の

木之就規矩 在梓匠輪輿

人之能爲文 由腹有詩書

という冒頭の四句などにも見える。第二句の「梓匠輪輿」は類語の四疊であり、五言句中で四言を占めている。先の「煎魚烹」よりも目止りする句法である。もとよりこの四語は、孟子「盡心」から、第一句の「規矩」とともに、そのまま採られた語である。これらの語が組合わされた一聯を見渡せば、十語中の六語を去つた残りの四語には、いわゆる六朝的な詩語に類するものは全くない。もと六朝的な詩語を形成する要素の

一は、広い意味をもつ形容詞的修飾語であつた。唐代においても常に行われ、李白や杜甫にもかなり強く反映していた。韓愈にも時に現われている。「酬裴十六功曹巡府西驛塗中見寄 124」における、

哀鴻鳴清耳 宿霧褰高旻

などに見える語である。「哀鴻」とか「高旻」とかいうような、主観的な、あるいは氣分的な形容詞を伴う語は、ここには片鱗だも存しない。存するのは、具體な概念をもつ單音節語のみである。さらに下二句を見れば、一音一語的な諸語が組合わされているだけである。漠然たる表現を避けて、事態をまざれなく指摘しようとする措辭である。

この一音一語的な措辭は、韓愈においては幅廣く行き渡っている。同じ詩の

由其不能學 所入遂異聞

などの句もそれである。しかもそのような場合には、多く語と語との關係を明晰にしようとする助字の類が挿まれている。たとえば先の「由腹

有詩書」や、この「由其不能學」の句に見える「由」である。「許由

とか「由來」とかの特殊な場合を除いて、語の本義に即する用法を検すれば、韓愈に比して遙かに多い作品量をもつ李白や杜甫よりも、韓愈において現われる頻度は甚しく高く、二倍にも達している。そのような語としてはこの「其」も挙げられる。李白においては僅かに六十位しか見えず、杜甫にしても百をいささか越す程度であるが、韓愈においては、李白の三倍にも達するのである。また、先の「符讀書城南」の冒頭の四句を顧みれば、「木之就規矩」や「人之能爲文」における「之」が目に入る。この「之」も本來、語と語との關係を示す助字であるが、そのような用法としては、李・杜よりも韓愈において特に目立つて頻りである。韓愈の措辭は、他に比して著しく分析的なのである。

「之」について見れば、「此日可惜 038」の

淮之水舒舒 楚山直叢叢

も注意すべき場合である。この「之」は、二句の對をわざわざ避けるために置かれたものようである。その結果、五言句の本來の律調である上二・下三の構成を壊し、上三・下二の破格的な響きを突き上げている。この本來の律調を破る句脈は、韓愈においては所々に見られる。「孟東野失子 107」の

彼於女何有 乃令蕃且延

や「薦士 054」の

有窮者孟郊 受材實雄鷲

などもそれである。五言のみならず七言においても同じい。七言は上四・下三が常調であるが、韓愈は上三・下四と構成することが少くない。

しばしば言及した「陸渾山火」には、

要余和增怪又煩 雖欲悔舌不可捫

なども見え、「送區弘南歸 101」を讀めば、

我念前人譬葑菲 落以斧引以纏微

とか、また

離其母妻絶因依 嗟我道不能自肥

なども目にふれよう。もとよりこのような構成がかつて存しなかつたのではない。何義門が「漢鏡歌上雅篇曰、山無陵江水爲竭。又、汝南童謠曰、飯我豆食羹芋魁。」と指摘するように、漢代樂府に早い例は見出し得る。ただ、六朝以來、七言においては上四・下三が常格となつていたのである。唐代に至ると樂府詩においても全くその格調が定着していた。それを韓愈は大膽に、しかも頻りに犯すのである。

傳的な歌詩の常法を無視することのような傾向は、句の續き方においても、さまざまな様相を以つて現われる。「江漢 037」の

江漢雖云廣 乘舟渡無艱

流沙信難行 馬足常往還

凄風結衝波 狐裘能禦寒

終宵處幽室 華燭光爛爛

においては、上句と下句はそれぞれに意味の上で獨立し難く、相い違つてはじめて一意を成す。しかもそれが四聯にわたつて疊まれているのである。まさに目を惹くものがある。また特殊な場合を挙げれば、五言律詩における隔句對も例となろう。「奉使常山 377」の冒頭にある

朗朗聞街鼓 晨起似朝時

翻翻走驛馬 春盡是歸期

の四句にも見える。五律では、第三句と第四句とが對するのが正統的な構成であつた。當時においても十分に意識されていたことである。しかしここでは、第一と第二は、第三と第四との二句に向つて隔句對となり、第三と第四との對を破るのである。この仕方は他にも見える。「送李員外陸院長分司東都 341」の

去年秋露下 羈旅逐東征

今歲春光動 驅馳別上京

もそれである。この隔句對は、單なる偶然によるものではなく、韓愈においては自覺的に構成されたものようである。韓愈は意を以つて、ことさらに常格を破つて行くのである。

韻律の面についてもこの傾向はかなり強い。「謁衡嶽廟 084」は、王漁洋の「古詩平仄論」開卷第一に掲げられ、七言古詩の典型と見なされておられ、平仄や一韻到底などの諸點からしても、全く當時の通念に則つたものである。このような常格に従う歌詩を作りつつも、韓愈はまた、常格から遠く離れて、平仄や押韻の通念を無視することも多い。押韻について言えば、毎句押韻の形式が目立つものの一である。「鳴鴈 072」の

嗷嗷鳴鴈鳴且飛 窮秋南去春北歸

去寒就暖識所依 天長地闊棲息稀

がその形式である。このような類は、「劉生詩 096」における「劉」から始り「讐」に終る三十一の韻字、「陸渾山火」の、皇甫湜の韻を用いる十三元の五十九の韻字なども数えられる。このようにかなりの長篇に

において毎句押韻の形式をとるのは、ただに常識の外に出ることに止らず、自己の能力を誇示する意圖によるとさえ考えられる。もとよりこのような場合、韻類は當時の通念に従うことが多いが、必ずしもそうとは限られない。たとえば先に挙げた「鳴鴈」を顧みれば、「飛」「歸」「依」「稀」などから、第八句の「非」までは五微に屬するが、それに續く第九句の「多」から第十三句の「何」までの五句は五歌に屬する。一見換韻のように見えるが、古韻から見れば、五微と五歌とは相い通ずるから、恐らく一韻として考えられていたのであろう。とすれば韓愈は、當時の觀念を越えて、古代の音韻によつたこととなる。能力のみならず、知識の廣さや確かさを發揮するための形式とも觀ぜられる。もともと毎句押韻のことは、遠く漢の「柏梁詩」にも見える。それらを顧みつつ、詩經における古韻などを採り上げたのであろう。このような古い形式を導入することに、韓愈ほど熱意をもつた詩人は稀れである。

押韻については、さらに異常な現象も他にある。かつて兪場が、其奇横偏在用韻處貫下一筆。然後截住、以足上意。如盡日不得意、亦獨何心等句是也。

と指摘しているような場合である。「盡日不得意」の句について、「嗟哉董生行<sup>600</sup>」に例をとれば、

嗟哉董生朝出耕 夜歸讀古人書

盡日不得意 或山于樵或水于漁

入府具甘旨 上堂問起居

において、「書」「漁」「居」が韻字であるから、第一句と第二句とで意が一應完結すべきであるが、ここでは二句で止まらず、次の第三句

「盡日不得意」まで續き、そこにおいて意がまとまる。第三句は上二句の意を補つていたのである。韻と意とが相い應じない。この意と韻の錯雜した關係は、六朝以來の傳統的な調和形式からはみ出るものであり、ことに律詩成立以後の均齊感を無視するものでもあつた。それだけに、韓愈は、古韻による押韻や、またあの五七言句における上下の破格と同じように、傳統的な歌詩の外に出ようとして、敢えて試みたのであろう。

韓愈の措辭は一般に分析的であつた。それは對象を克明に敘述しようとする態度によつて導かれたものである。ただしその結果は、傳統的な歌詩の措辭とはかなり異なる様相を呈し、目新しい言語構成となつていた。この新鮮さは、さらに新奇さを呼び求める。そして遂には傳統的な言語構成を、あらゆる面にわたつて破り、積極的に新生面を開拓しようとする。一聯における上下句の連り方や、五律における隔句對、さらには韻と意の錯雜する關係など、この方向において實現したのである。もとよりこれらの手法の悉くが、韓愈において創造されたのではない。その多くは、當時の傳統が成立する以前、ないしは成立の過程において、散發的に出現していたものである。そのような遠い過去の實例を顧みて、近い過去なり、或は今様とでもいふべき形式を超えようと、韓愈はさまざまに趣向をこらしたのである。傳統がきびしく定着しておればおぼろほど、傳統以前のものの復活は、異常なものとして受け容れられざるを得ない。韓愈の措辭や句法など、言語そのものが奇異な様相を呈するのは、傳統の中にあり、あるいはそこに潜在するものを顯在にまでせり上げるというような方向ではなく、傳統の中にありながら、時にはそれに否定的に作用する要素までも導入して、意識的に特異なものを打ち出そうと

試みたからであつた。

四

韓愈の言語には、歌詩の常識を破るような傾向があつた。それはもともと發想そのものが、常識と離れるような傾向をもつていたからである。

「叉魚招張功曹<sup>230</sup>」に

懶去愁無食 龍移懼見燒

という句があるが、二句ともにいわゆる倒置法によつて構成されていた。上句について見れば、「愁無食」という事態によつて、「懶去」という結果となつたことを指摘するのであるが、表現面では、「懶去」の事態が先に提出され、その事態を釋明する形として、「愁無食」が連ねられているのである。たとへ時間に沿うて流れる意識のままに語を措いたとしても、常識的な表現ではなく、むしろ常識を歪めたような表現となつている。韓愈がこのような倒置法をしばしば用いるのは、實は韓愈の發想が、常識的なものを避け、常識を超脱しようとする傾向をもつていたことに根據があるのである。

常識は文學の上では典故である。韓愈の立場では、この典故が變容され易くなる。たとえば「送文暢師北遊<sup>081</sup>」の

風塵一出門 時日多如髮

における「多如髮」である。「如髮」はもと、詩經「都人士」の「彼君子女、綢直如髮。」から出で、毛傳によつて「密直」の比擬と定められ、以後「不絶」とか「直」などの方向に用いられ、さらに文選の、鮑照の「代君子有所思」に見える「馳道直如髮」の句によつて、いよいよ意味

が限定され、ほとんど「直」の比擬として固定していた。しかしここでは「直」とは全く無關係に、「多」の比擬として用いられている。もとより典故を無視した用法も過去に存しないではない。李白の「經亂離後天恩流夜郎憶舊遊」の、「水樹綠如髮」に見えるのもその一例である。このような場合を顧みつつ、韓愈はいよいよ典故の外に出るのである。「多」について「如髮」と發想するのは、全くその前例を見ない。

無視するのみではなく、逆用するものも少くない。典故の翻用もその著しい一例である。今擧げた「送文暢師北遊」に、

昨來得京官 照壁喜見蝎

という句があるが、「蝎」は「蠍」とも書かれる毒蟲であり、もともと「喜ぶ」べきものではなかつた。杜甫の「早秋苦熱堆案相仍」にも、「每愁夜中自足蠍」と詠ぜられていた。杜甫は世の中の常識に従つているのである。しかしここでは、「愁う」べきものではなく、「喜ぶ」べきものに轉じている。もとより常識を直接に否定したのではない。常識では「愁う」べきものすら、「喜び」の感情を昂ぶらせるものとして見られていたのである。したがつて杜甫の句からすれば、その「愁」を踏まえることによつて、「喜」を突き上げるものとなつていたのである。

杜甫の句を意識しつつ、それを裏返すからである。このことは、「調衡嶽廟<sup>084</sup>」の「猿鳴鐘動不知曙」の場合で、より明かとなる。現實においてには、「猿鳴」は「鐘動」をも含めて、必ずしも「曙」などに結びつくものではない。「曙」に連るとすれば、謝靈運の「從斤竹澗越嶺溪行」に見える、「猿鳴誠知曙」という句においてである。ここで「猿鳴」と「知曙」とが並べられる以上、この一句は謝靈運の句を踏んでいるもの

と認めざるを得ない。にもかかわらず、謝靈運の句は、そこにない「不」という否定詞によつて、全く反轉させられている。謝靈運によつて文學的常識ともなつていた發想が、ここでは打ち破られるのである。そして、それによつてこそ、前句の「星月揜映雲臙臙」という情景が、強く心理に反映されることを示し得るのである。典故の翻用は、文學的常識を逆用し、事態を強調する効果をもつ。それは文學的常識を何らかの形で否定するからである。

もともと韓愈には否定詞が多い。韓愈において最も多く用いられている字は、「不」という否定詞であり、この「不」に次いで第二位にあるのも、「無」という否定詞である。たとえ李白や杜甫において、頻度の高い字が「不」であるとしても、文字總量から見れば、韓愈ほどに大きな割合は占めない。しかも韓愈においては、李白や杜甫ではさほど多くはなく、頻度からしても次位にはない「無」が、また大きな割合を占めている。したがつて否定詞が一字もない歌詩なども、全作品量から見れば、李白や杜甫に比較し得ないほど少い。このことは、否定詞が、對象に對して知的な反省を加え、肯定面を裏返して見る、そのような立場において成立するものである限り、韓愈の發想の知的傾向を示唆するものとなる。典故の翻用もこの面から出たものであろう。それ故にこそ、典故の翻用はまた知的な興趣をも醸し出すのである。ここに至つては、單なる知識の誇示のためではなく、知的な興趣に誘われているように見える。翻用は韓愈の措辭を支える重要な發想の一形式である。

この翻用はやがて典故を、直接に變容するに至る。「北極 037」にもその例を見ることができる。冒頭における

北極有羈羽 南溟有沈鱗

川原浩浩隔 影響兩無因

風雲一朝會 變化成一身

誰言道里遠 感激疾如神

である。この四聯は、莊子「逍遙遊」の、

北冥有魚、其名爲鯢。鯢之大、不知其幾千里也。化而爲鳥、其名爲鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。是鳥也、

海運則將徙於南冥。南冥者天池也。

に想を仰ぐように思われる。しかし莊子では、「北冥」にあるのは「魚」であり、「南冥」に行くのは「鳥」である。しかも「魚」が「鳥」に化するのであつて、別の二物ではない。ただ列子の「湯問」には、その莊子とずれのある記事も見える。

終髮北之北、有溟海者。天池也。有魚焉。其廣數千里、其長稱焉。

其名爲鯢。有鳥焉。其名爲鵬。翼若垂天之雲、其體稱焉。世豈知有

此物哉。

ここでは「魚」と「鳥」とが「溟海」にいて、相異なる二物であることは、ここに合うが、なおともに「北」「溟」にあることにおいて差がある。いずれにしてもここに合う記事はない。ただし「南溟」の語は莊子に見える。この「南溟」から「北極」の語が求められ、莊子の「鳥」と「魚」が、「羽」と「鱗」に置き代えられ、かつて用いられていた「羈羽」と「沈鱗」に昇華されたのである。莊子から端緒が得られたことに疑いない。しかし二物をして、やがて相い會せしめるのは、韓愈の構想である。韓愈はそれと知られるような典故をも、主題によつて、その方向を

變容するのである。

ただしこのような發想には、ある程度まで分析を可能にするものがある。「答道士寄樹雞 353」の末は、

煩君自入華陽洞 直割乖龍左耳來

と結ばれる。まこと朱彝尊が述べるように、「豪氣駭人」というべきであろう。ただしこの發想も、追求するに困難ではない。「樹雞」は、本草にも見えるように「木耳」とも言われていた。この「木耳」の異様な形相から、それまでもしばしば用いられていた「龍耳」の語が連想され、やがて莊子の飄龍の珠を探るといふ故事が顧みられ、そのまま錢仲聯氏が指摘する、報恩經の「善友太子入海、乞得心王左耳中如意摩尼寶珠。」の語が採られたのであろう。「和虞部盧四酬翰林錢七赤藤杖歌 115」の

共傳滇神出水獻 赤龍拔鬚血淋離

又云羲和操火鞭 暝到西極睡所遺

について、沈德潛は唐詩別裁集で、「此種奇傑、昌黎獨造。」と評するが、構成過程の分析を拒否するほどではない。上二句は、「赤藤杖」を「龍鬚」に擬するのが、發想の核であるが、それは「題張十一旅舍三詠」で、「蒲萄 254」について、「莫辭添竹引龍鬚」と述べ、「龍鬚」と發想するように、古今注以來、つる草に「龍鬚」と呼ばれるものがあるからである。「藤杖」の形相から、つる草が想起され、その異様さから、「龍鬚」の語が連想されたのである。「赤龍」の「赤」と「血淋離」の「血」は、「藤杖」の「赤」さから加えられ、やがて「滇神」に結びつけられたのである。下二句も「杖」という點から、常語でもある「羲和の鞭」が着想され、この着想が核となり、それが展べ擴げられたのである。韓愈は素朴な連想から始め、語彙を媒介にしつつ、措辭を擴大して行くのである。膨張し切つた結果から見れば、まことに「奇傑」にも

「豪莊」にも映るのである。それは「乖龍」や「龍鬚」における、「龍」そのものにも似る。まこと韓愈はしばしば「龍」を呼ぶ。あの「遊青龍寺贈崔大補闕」で、「柿」の葉や實について、

然雲燒樹大實駢 金烏下啄赭虬卵

という場合にも見える。題材の中心となる赤く大きな實を、「赭虬卵」という。異常なものとして「龍」が呼ばれている。異常な韓愈の發想こそ、その「龍」になぞらえられよう。ただし「龍」は、すでに易經より姿を見せ、やがて莊子や史記にも現われていた。「龍」は異常なものはあつても、どこまでも人によつて構成されたものである。しかも、もともと天外から落ちて來るものではなく、地上から天井に向つて飛昇するのである。韓愈の發想は、それがいかに「奇傑」に見えても、論理的な追求をある程度可能にする限り、知的操作によるものといえよう。先の翻用や脱化のことも、濃淡の差こそあれ、典故を基礎にもつ點において、知的構成なのである。韓愈の發想の本質は、直觀的であるよりも、より強く分析的であり、知的であつた。もと韓愈の言語は、文字から語彙、さらに措辭や形式などに至るまで、まことに奇異な様相を示していた。しかしこれらの言語も、古典から出で、あるいは古語と調和するものであり、さらにはまぎれなく表現しようとする意圖に支えられている限り、すべて幅厚い知的濾過を経たものであつた。それは言語を運營する發想そのものが、すでに強度の知的操作の上に成立していたからである。(未完)

附記 韓愈の詩題に添えた數字は、先に提出した拙稿『韓愈索引(一)』(1986)において設定した作品番號であり、文集における巻次を示す代りに用いたものである。